高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.7

●「霧氷（四国山地・伊吹山）」（写真提供／松岡敏之氏）

リレー随筆⑦　土佐の光と影 ―― 田中光二

はじめて高知市を訪れたのは二十代のころである。

漠然とおぼえているのは、ひどく遠い所…つまり僻地だったという印象である。

しかし僻地にしてはひどく明るいところだった。季節は秋だったとおもうが、とくに桂浜のまばゆい風光は印象に強く残った。

市電が走っているこぢんまりとした町のたたずまいも好ましかった。

もうひとつ印象に残っているのは、龍河洞の闇の濃さだ。ぼくは閉所恐怖症のくせに洞窟が好きで、どこに出掛けても洞窟があればかならずもぐりこむ。

洞窟は男が少年のまま残している冒険心を刺激するのだろう。三十代になってから小説を書き出して作家になってしまったが、初期の作品はみんな冒険小説ふうである。このときの洞窟探検が原点になっているのである。

このときは、時間もなくまた関心もなく、父親の郷里である土佐山村には行かなかった。つまりただの観光客として高知を訪れたのである。

桂浜の明るさと、龍河洞の闇の濃さとが、強烈な対比として記憶に残った。

二度目に高知入りしたのは〝オリンポスの黄昏〟を書いたときである。

この作品は長年の父親との心理的な葛藤にケリをつけるべく書いたものなので、当然土佐山村を訪ねずにはすまなかった。

人間は風土の産物である。いいかえると風土によって人格が形成される。祖父から父へと伝わったはずのこの風土の影響を無視するわけにはいかない。

祖父が生まれたのは土佐山村の菖蒲という村落である。

この菖蒲へは、地図で見ると、高知市の北山を越えてすぐのところにある。車を借りて向かったのだが、道を間違えて愛媛との県境まで行ってしまった。

菖蒲への入り口を見逃してしまったのである。引き返してなんとか捜し当て、狭い谷に入って行った。

鏡川の源流の流れる、まさにV字形の狭い谷であった。その両側の斜面が耕されて畑となっており、点々と人家がのぞめる。それはまさにへばりつく感じである。

このとき感じたのは、土佐人にもし偏屈もしくは狷介というキャラクターがあるならば、それはこのような狭い谷で形成されたものだろうということである。

いや、それは土佐の受難の歴史そのものによって形成されたというのが定説かもしれない。

しかしぼくの祖父についてはあきらかにこの狭い谷、日当たりの悪そうな谷間で形成されたものだろう。ここではのびのびとした人間など生まれようがない。

祖父は郷土史家としてはいちおう名を成したが、その性格は偏屈、いつも鬱屈するものを抱きそのためか酒乱の気味があった。

これはおそらく幕末から明治の土佐の若者たちに共通のキャラクターであったろう。

父もまた当然それを受け継いでいたわけである。むろんぼくも受け継いでいる。

菖蒲をみたあと桂浜に回ったが、ここはあいかわらず陽光があふれ、底抜けに明るかった。

菖蒲の鬱屈したたたずまいと桂浜の陽光が、ぼくのなかに新しい土佐の光と影の対比となって残ったのである。

（作家、田中英光二男）

高知県立文学館

◆次回企画展によせて◆

平成11年12月18日(土)～平成12年2月13日(日)

「岡本弥太 生誕100年記念展」

―新世紀の詩人たちへ―

岡本　弥太

岡本弥太。郷里の詩人たちの間でその名が語られるとき、そこには惜しげもない賞賛の言葉と、熱い敬愛のまなざしがあります。たしかに実在した詩人なのに、人々の間でいまも語られるかれは、一種神聖な偶像のようでさえあるのです。岡本弥太というひとりの詩人を考えるとき、この不思議な熱気のようなものはつねにつきまといます。この詩人のもっとも特異な点はそこにあるといえるのではないでしょうか。

＊

岡本弥太は、1899年、いまから100年前に、高知県香美郡香我美町に生まれました。本名・亀弥太。家は仕出し業、のちに薬種商。生きるために忙しく働く貧しい父母の姿をみて育った弥太は、作文だけは得意な少年でしたが、文学作品に触れる機会もなく、成長するまでその資質を伸ばすきっかけもありませんでした。「寧ろ幼き者の胸裡に自生するものこそ詩であった」と弥太は後に言っています。

弥太が本格的に詩を書きはじめたのは、大正7年（1918）、20歳のとき、神戸の鈴木商店に就職した頃、同居していた近森豊馬（筆名・夜木虹太郎）という友人に触発されたからでした。

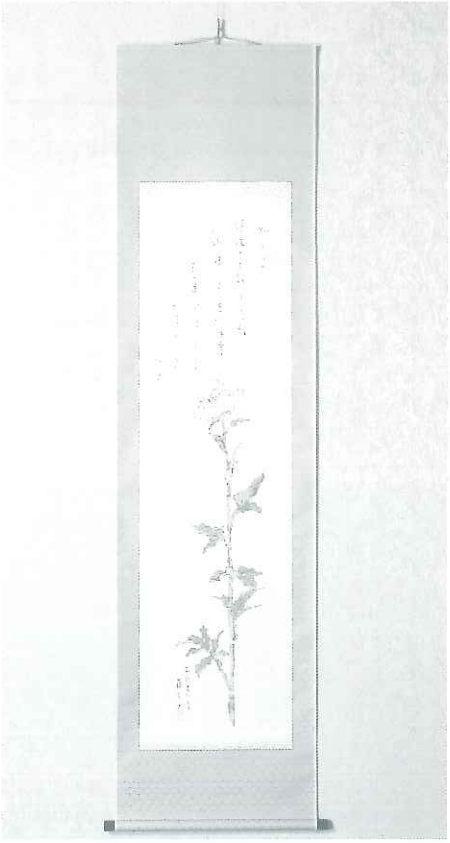
鈴木商店を辞し、郷里に帰ってからも、小学校の教員として勤めながら、同人詩誌「ゴルゴダ」「青樹」（のち改題「海底深林」）などを発刊し、精力的に作品を発表していきます。当時まだ無名であった宮沢賢治の『春と修羅』に出会い、強い衝撃を受けたことも、のちの詩風に影響を与えています。

詩人としての弥太は晩熟で、中央詩誌にはじめてその名を現すのは、昭和5年（1930）、32歳のときです。「詩神」に宮崎孝政の選で新人欄に掲載されたのが最初でした。昭和7年（1932）、34歳のときには、第一詩集『瀧』を限定350部で刊行しますが、これが中央詩壇からも注目を集め、その名は一躍全国的に知られるようになります。

その頃、日本の新体詩は確立されたばかりで、詩というジャンルの文学は新鮮な可能性に満ちていました。中央詩壇には綺羅星のごとくたくさんの才能あふれ

弥太忌芳名録

「麗詩仙」同人たちと（右端弥太）



藤田太郎画、弥太詩賛の軸（近藤紫満氏蔵）

る詩人たちが活躍し、現在でも多くの人々に愛される詩集がこの頃に多く刊行されました。

その波を受け、全国津々浦々には、薄い売れない同人誌が氾濫し、あらゆる無名詩人たちがそこに作品を発表していたのです。そこにはもしかすると、日本の詩の歴史を塗り替えるような傑作が発表されていたかもしれません。けれど、それらの作品は流れ星のように時間の流れに埋もれ、消えてしまう宿命にありました。地方と中央の格差が今以上に歴然としていた当時、作品の評価はその本質と同じレベルで、機会というものに左右されてしまう面があったのです。

そんな中で出されたこの詩集の意味は重大でした。土佐の辺境に暮らすひとりの無名詩人が、中央詩壇に注目されるだけの詩集を出し得たという事実です。あらゆるマイナス要素を、詩集の本質的な価値でうち消した弥太の仕事は、大きな賞賛を持って迎えられました。全国各地に数え切れないほどいた地方詩人たちに、弥太はひとつの方向性と大きな希望を与えました。地方に根を張って暮らすからこそ生まれ出る言葉が、弥太の詩の価値だったのです。

しかしながら、弥太の中には大きなジレンマが生まれました。可能性を見いだしたと同時に、限界も感じたのではないでしょうか。つまり、地方に根を下ろし、その中で書くからこそ作品の価値は生まれるにも関わらず、表現者として多くの読者を獲得したいという当たり前の欲求は、地方にいては充分満たされないのでした。弥太自身、そのことを強く感じていたのでしょう。皮肉なことに、そのジレンマもまた弥太の作品の根底を流れる深い命題となり、さらにはかれの生涯にわたる懊悩につながっていくのです。

＊

弥太は晩年の作品で自らのことを「ひとつの仮説」といい、「おれはまだ刼（カルパ）のその蒼々の／燐の仮説もたてられないで身震する」といいました。教師として、家庭人として大きく道を踏みはずすことのなかった弥太でしたが、その内面にはつねに生そのものに対する苦悩がありました。仮説として迷い、答えのない問いを繰り返すことこそが、命をみつめる弥太の真摯な姿勢だったのです。

昭和17年（1942）、弥太は43歳でこの世を去ります。弥太を慕うたくさんの人々は多いに悲しみ、惜しみました。その死後の顕彰事業も活発に行われ、成果もあげています。しかしながら、弥太の作品そのものや、かれが本当に目指したものはなんだったのか、一般的には知られていないままです。

生誕100年という節目の年を迎えるにあたり、ひとりの不遇な地方詩人が目指したもの、そしてかれが生涯を捧げた詩というものはなんだったのか、改めて考える本展を開催します。これからの詩がむかっていく方向を少しでも考えるきっかけになれば幸いです。

（学芸員　野中佐知子）

【主な展示資料】

■自筆原稿・書簡

■宮沢賢治とゆかり資料

■弥太が関わった当時の全国同人詩誌

■同時代の詩集

■弥太ゆかりの文学者関係資料　等

◆記念講演会

※要事前申し込み（はがき）定員150名

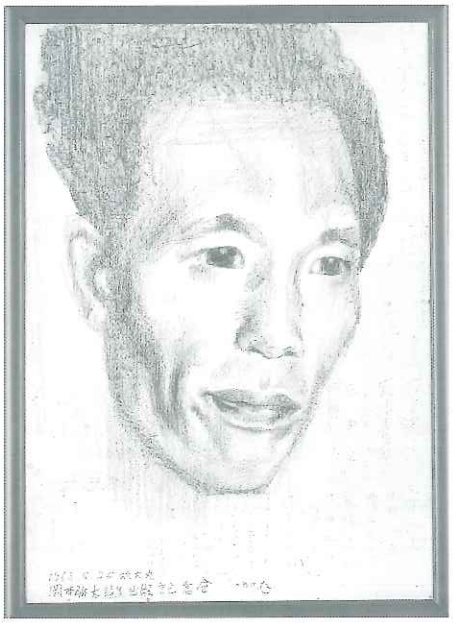
◇1月23日（日）・岡本弥太生誕記念日

13時30分～15時

◇講師　嶋岡　晨氏（詩人、立正大学教授）

◇演題　岡本弥太と「日本詩壇」

◇場所　文学館1階ホール



岡本弥太詩集出版記念寄せ書き

墓碑拓本
近森良明寄贈　香我美町立図書館蔵

学芸員メモ

「田中英光展－純粋な魂の軌跡－」を終えて

「田中英光展記念講演会」田中励儀教授

10月9日からはじまった「没後50年 田中英光展～純粋な魂の軌跡～」は11月28日で終了した。生きたいと願いながらも行き場を失っていった英光は、50年前の1949年に、子どもたちへの思いを残し、三鷹禅林寺の太宰治の墓前でこの世にさようならを告げた。

その命日の11月3日、英光を偲び「記念講演会」が文学館ホールで行われ、田中励儀（れいぎ）教授（同志社大）が「田中英光の文学—虚構への信頼」と題して講演、英光のすごい創作意欲に驚かされることや、英光文学の可能性を分析した。続いて、二男で作家の田中光二氏、矢島道弘無頼文学会事務局長（国士舘大）、高知市在住の高橋正教授（徳島文理大）らで、座談会「田中英光・人と文学」が行われた。時代的背景、英光の人物像や土佐人的気質との関係にまで話はおよび、各視点からの英光文学について、熱っぽく論議された。

戦中・戦後の混乱の中、劇的な人生を純粋に生きた英光の人間性が、終始感じられる講演会であった。

父　英重の現在の生家

翌日、英光の父・岩崎英重（ひでしげ）が育った土佐山村菖蒲に講師の先生方をご案内した。

英重が号とした鏡川の源流がはるか下方に輝くのをのぞみ、山々に囲まれた空を見上げ、遠い明治の時代に、この地から「天下を理想」として上京した英重の行動力に、この地を訪れる人は、驚きを感じる。くねくねとした山道を上りながら、先生方も例外ではなく、感嘆の声を漏らした。生家近くの岩崎家墓地には、代々の墓とともに英重が建てた祖父・英明（あきら）のひときわ大きな墓が木々に囲まれて静かにあった。

英光の父　岩崎英重（鏡川）

明治26年、英重はこの山里の故郷を見棄て、繭の売掛金を掴み出奔し、東京・築地本願寺に寄宿し共同自炊をしながら勉学に励んだ。当時の英重は、驚くほど、物事に構わず無頓着であったらしい。英重が自炊当番で漬け物を出したとき、縞蚯蚓（みみず）も一緒に盛ってしまった。何れ劣らぬ乱暴な連中もさすがに箸をおいたが、英重だけは蚯蚓をつまみ外に放り出し平気で食べたとの、逸話も残っている。英光は、この父・英重の姿に、勉強に夢中な、貧しい自作農の息子を発見して、微笑ましいものを感じている。その後、英重は活版所興雲閣を興すが1年で廃業、新聞社も創立するが2年の寿命であった。その間に『後藤象二郎』（明治30年）、『消閑漫録』（随筆集）などを執筆するが、とにかく生活に困り、母・済（ひとし）は絵はがきや錦絵を売ったり、封筒貼りのような内職までしていた。やや家計が楽になったころ、赤ん坊を抱いた急病の乞食を「同じ人間じゃ、汚いことがあるか。」と家に入れ、彼らが元気になるまで、4、5日面倒を見てやったという英重の気性を表す話も残っている。

消閑漫録（岩崎英重著）

明治44年、英重の一生を通じての大作、雪月花の三巻『桜田義挙録』が刊行され、維新の元勲といわれる人々から広く支持を得た。特に田中光顕伯が注目し、全国の小学校に修身書として備えさせた。光顕伯の影響は大きく、英重は文部省維新史料編纂官となり、人生の方向が決まっていった。英光はこうして生活が安定したころ生まれ、光顕伯の「光」の一字をもらって英光と名付けられた。

英光が小学校に入学したころ、父・英重は肺病になり病気養生のため一家で鎌倉の別荘へ移った。英重の病状も一まず落ち着き、著述にもいそしめるようになったが、感情的にムラのある、怒りっぽい性格に変わっていった。『坂本龍馬関係文書』は、英重が喘息にむせかえりながら最後の努力をこめた作品で、現在で

も龍馬関係の文書を集めたものの中で完全に近いものとして高い評価を受けている。英光はここ鎌倉で少年時代を過ごし、『少年の信仰』や『我は海の子』のモデルとなった当間行浩先生に会い、文学的感受性を育てていった。

英光は無頼派作家の一人とされているが、父・英重の影響もあり『桑名古庵』『桜田門外』などの歴史物を描いたり、少年時代読んだ西遊記を題材に自分流に描いた『我が西遊記』など幅広い分野の作品を9年間という短い間に遺している。もし、英光が父の亡くなった53歳まで生きておられたら、社会や人間の心を見つめるその鋭い目は、年齢とともに変化しながら、多くの傑作を世に送り出したであろう。

英光は土佐には二度訪れただけであった。しかし、今回の企画展を通じ、土佐山村に源流を持つ鏡川が、祖父のその祖先の時代から変わることなく流れているように、英光の中に、父英重の先天的資質を作り上げた郷土・土佐の風土を感じ、豪快で純粋、熱し易く冷めやすい土佐人の血が脈々と流れているように思われてならない。

（学芸課　嶋崎るり子）

桑名古庵（英光著）

「田中英光展」をご覧のご遺族の方々

閲覧室から

『きものがたり』

宮尾登美子 著

それぞれ深い思い入れのある筆者の着物を、12カ月の四季に応じた随筆と、美しいカラー写真とともに紹介。

最近では普段から着物を着こなしている日本人も少なくなったが、筆者は自由に着物を楽しんでいる。好きなものを楽しく着こなすという姿勢は、着物に対する肩肘張った先入観もふと取り去ってくれるようだ。

同時に、それぞれの着物にまつわる思い出話からは、一枚の着物を仕立て直したり染め返したりしながら大切に着続けてゆく筆者の姿が浮かんでくる。贅沢で華やかなばかりではなく、慈しみながら長く付き合っていけるというゆかしさ。

日本人の大切にしてきた季節感、小物やその場の空気にもこだわる細やかな美的感覚を思い出させてくれる一冊。（99年3月発行、世界文化社、¥2、500）

※当館閲覧室でお読みいただけます。

（佐）

県内同人誌紹介

高知文学

高知文学学校研究科機関誌として、一九七五年に創刊された。以降、毎年一冊刊行、二五年で二五号をだした。

小説、随想などからなり意欲作が多く、これまでに金井明、木村美恵子、仁淀純子、岡上千枝子、唐岩宗次郎らの作品がそれぞれの年度の秀作として椋庵文学賞をうけてきた。毎号三〇篇内外の作品を収録し、三〇〇頁内外の雑誌として活況を呈している。

今回の二五号も島総一郎、だてようすけ、渡辺智恵、田代光三、麻岡道子ら熟練のかき手に、新人本山卓仁も現代をとらえる作品でいどんでいる。それに今号は先年、逝去した岡林清水前文学学校運営委員長の追悼に多くのページをさき、一二名が思いのこもるありし日の追悼を寄せている。編集山川禎彦・猪野睦。

発行所　高知市立中央公民館内高知文学学校研究科　発行人代表　中町子菊

二二一頁　一五〇〇円

土佐文学さんぽ 6

白牡丹図（はくぼたんず）

白い牡丹の花を
捧げるもの
剣を差して急ぐもの
日の光青くはてなく
このみちを
たれもかへらぬ

―詩集『瀧』巻頭詩―（昭和七年）

岡本弥太の詩碑

岡本　弥太
詩碑をめぐって

土佐の現代詩人たちがその詩作の入り口に立つ時、一度は振り返らずにはいられない詩人岡本弥太（一八九九～一九四二）は、香美郡岸本町（現香我美町岸本）に生まれた。生家に近い月見山麓にある詩碑に刻み込まれた詩が掲詩である。揮毫は高村光太郎。全国的には無名に近かった弥太と、高名な詩人との結びつきは、ちょっと意外である。揮毫を頼まれたその頃（昭和二十二年）の光太郎の生活は、「早池峰はすでに雲際に結晶すれども（略）わずかに杉の枯葉をひろひて／今夕の炉辺に一椀の雑炊を煖めんとす」（雪は白く積もり）の、風雪に耐える孤木のごときものであった。岩手県の山中で、戦争協力詩に対する自己浄化の日々を送っていたのである。

詩碑「白牡丹図」と光太郎を結びつけたのは、当時、詩人志望青年であった依光隆さん（画家・東京在住）。土佐の詩人たちの声を代表して、揮毫依頼の手紙を出したところ、すぐに「―（略）皆んなの総意であるならば小生字を書く事はいなみません」（昭和二十二年十一月八日）のハガキが届き、翌二十三年七月十日、弥太の詩友、教え子たちの浄財四万円を投じた、青木石づくりの見事な詩碑（高さ五尺六寸、幅三尺五寸）が完成したのである。

依光さんが詩碑のお礼を兼ねて、はるばる岩手県まで旅立ったのは、その一年後。

「スシ詰めの列車に乗って、三日ぐらいかかったかなあ。山小屋への途中まで、光太郎さんは迎えに来てくれましてね」。出くわした瞬間「ゴッツイなあ！」とたまげた。小屋は掘立小屋同然だった。囲炉裏に腰を下ろした光太郎は「カビがはえているけど大丈夫」と云いつつ、餅を包丁で削り、焼いてくれたという。弥太のことは、「注目していましたよ」と云い、揮毫の話は「智恵子が生きていたら、賛成してくれていたでしょう」と云って、土佐からの若き使者を感激させたのだった。

弥太の詩は一篇一篇、暗く、烈しく、深い悲しみにみちている。それゆえにか、陽光燦々の地に生まれ、育ったとは思えないほど〝北方の詩人〟のイメージがつきまとう。「青きあられの高士」「南海の宮澤賢治」の呼称、悼尾を飾った光太郎、と詩の磁針は常に北方を指している。詩集『瀧』（昭和七年刊）には、内なる修羅と切り結んでできた結晶ともいうべき、身にしみ徹るような透明感をもつ〝白〟のイメージが、いたるところに敷きつめられている。…白雲…白雪…白鯉…白い修羅…白い恩愛等の頻出。

瀧はおのれ瀧はおのれ
瀧はあくまで白くかなしく
一点のにごりすらもたない
雨もあられも雪もただ一つに合は
　す天地の白の修羅のしぶき
そこに白い鯉すら寄らない

―瀧（其弐第三連）

一方、光りらしい光りを求めても、螢の光、砂の光、愛の燐光…と、修羅の撹拌にあっていったん内部に蔵い込まれ再生された観念的チョロ火が乏しい光りを投げかけているのみ。

ところで、弥太の教え子であった酒仙詩人立仙啓一（一九一四～一九八一・夜須町）には、土佐の陽光がトンボの翅を透かすごとく作用したらしく、

「草の葉はギラツク雲を刺し／ムンムン草いきれ／けさ山羊の子が死んでいた／足をのばしたまま／白く悲しく／地に埋めてやったら／キリギリスたち！／草原の白焔（コヲリ）の底から鳴きしきる（後略）」（炎天エレジー）と、ドライな明るさがたちこめている。自然は、二人の詩情を一枚の境に導くことなく、明暗二つに変奏したようである。

（国則二雄志）

見どころ＝●地引網●宝幢院の句碑●須留田八幡宮夏祭（絵金芝居絵）

資料受贈報告
（平成十一年九月～十一月）

敬称略

▼**橋本嘉子**・「北見志保子 書簡額 藤井嘉子宛」▼**徳広睦子**・上林暁宛南風会寄せ書き▼**田中瀧治**・土佐日記関係資料・落合直文校閲「土佐日記 読本・全」他全17冊▼**飛鳥企画**・「女性作家シリーズ2.3」ほか▼**市川敦子**・「短歌往来」▼**秋田稔**・「探偵随想第31号」ほか▼**佐藤ハル子**・「明治・ある歌人 前田純孝のこと」▼**西岡寿美子**・「'99高知詩集」▼**南部典代**・「草の葉44集」▼**大森一彦**・「續冬彦集」▼**益和實**・「（句集）殿」▼**小松亮**・「有線の広場 第3集」▼**津野輔猷**・「これで充分 ことわざ事典」▼**西田勝**・「文学的立場」ほか▼**三浦良一**・「風の行方」▼**老人クラブ**・永井路子「茜さす（上・下）」ほか▼**芭蕉翁記念館**・「芭蕉祭献詠句集」▼井上孝夫・「録音テープ 土佐日記」ほか▼**淡交社**・「日本の文学館百五十選」▼**高知新聞企業**・「高知県人名事典（新版）」▼**憲政記念館**・「日本議会政治の歩み特別展 展示目録」▼**姫路文学館**・「血と雨の墓標 評伝・岸上大作―」ほか▼**さいたま文学館**・「森村誠一の証明～現代社会のリポーター」▼**中谷宇吉郎雪の科学館**・「中谷宇吉郎 雪の物語」ほか▼松本清張記念館・「松本清張研究１９９９」▼**仙台文学館**・「探検！こどもの本」▼**鎌倉文学館**・「生誕百年記念 川端康成―美しい日本・そして鎌倉―」▼**山梨文学館**・「山梨の文学―21世紀へ―」▼**壺井栄文学館**・「壺井栄のしおり」▼**北海道開拓の村**・「北海道開拓の村要覧」ほか

※このほかたくさんの皆様から寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

◆◆◆文学館日誌 1999年9月～11月◆◆◆

9月

◆1日(水)
東京都江戸川区議会議員 12名来館

◆4日(土)
石川啄木展（1）記念講演会
演題「啄木の新しさと魅力」
講師 日本近代文学館理事長、詩人
中村稔氏
（2）対談 中村稔氏
歌人 佐佐木幸綱氏
文学館ホール 参加者 120名

石川啄木展 記念対談
向かって左より中村稔・佐佐木幸綱各氏

◆9日(木)
横山隆一氏（横山隆一氏実弟）来館

◆18日(土)
「田中英光」専門講座開催 参加者 50名
講師 徳島文理大学教授 高橋正氏

◆19日(日)
「石川啄木～貧苦と挫折を越えて～展」閉幕
入館者 約4600名

◆21日(火)
田中宏行氏（田中貢太郎令孫）来館
橋本嘉子氏ほか 北見志保子書簡額寄贈の為来館

10月

◆9日(土)
「没後50年・田中英光展～純粋な魂の軌跡～」開幕。11月28日(日)まで

◆16日(土)
「田中英光」専門講座 参加者 50名
アルバート・ロト「ショパン没後50年」ピアノコンサート
文学館1階ホール 参加者 40名

◆17日(日)・11月14日(日)
文学館文芸映画鑑賞会・太宰治原作「斜陽」
文学館1階ホール 参加者 85名

◆22日(金)
中谷宇吉郎「雪の科学館」より館長神山健三氏、畠山三徳氏来館

◆24日(日)
第1回 文学館「朗読の会」
文学館1階ホール 参加者 60名
「絵画館付近」内海隆一郎作
「汲む・おんなのことば」茨城のり子詩集より
「六の宮の姫君」芥川龍之介作
朗読 野中久美子、松田光代

第1回文学館朗読の会
「六の宮の姫君」芥川龍之介作
朗読 松田光代氏

◆28日(木)～31日(日)まで
「連合高知文化展」 文学館1階ホール

11月

◆3日(水)
田中英光展 記念講演会開催 参加者 70名
講演会「田中英光の文学—虚構への信頼」
講師 同志社大学教授 田中励儀氏
座談会「田中英光・人と文学」
田中光二氏（田中英光二男・小説家）
矢島道弘氏（国士舘大学講師・無頼文学会事務局長）
高橋 正氏（徳島文理大学教授）

◆6日(土)
第2回文学館「朗読の会」 参加者 50名
「手伝い求む」高橋洋子作
「ひがん・じゃらく」三浦哲郎作
「墨丸」山本周五郎作
朗読・あめんぼ朗読会

◆7日(日)
「第2回児童生徒文学作品朗読コンクール本選」 参加者 80名
文学館では朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育成したいという願いから、昨年より児童生徒文学作品朗読コンクールを開催している。本年度も地区予選を通過した22名によって本選コンクールが開催された。
金賞 本山町立本山小学校6年 佐古田頌子
田島征彦作「そうべえごくらくへゆく」
特別賞 高知大学付属小学校2年 伊藤 祥香
かんざわとしこ作「いちごつみ」

座談会「田中英光・人と文学」
向かって左より高橋正・田中光二・矢島道弘の各氏

第2回児童生徒文学作品朗読コンクール本選出場者22名。中列向かって左より館長橋田と一人おいて山下明生氏

記念講演「子どもと本のおいしい関係」
講師 日本文芸家協会会員
児童文学者 山下明生氏

◆11日(木)
清岡卓行氏「マロニエの花が言った」で野間文芸賞受賞

◆12日(金)
文学館観覧料無料入館日

◆17日(水)
生誕100年作家記念映画会
川端康成原作「伊豆の踊子」・（昭和8年・五所平之助監督 田中絹代主演、サイレント）
壺井栄原作「二十四の瞳」（昭和29年・木下恵介監督）参加者 約70名

◆20日(土)
5回シリーズ 第2回文学カレッジ近世の文学「袖貝と月の字」講師 竹本義明氏 参加者 50名
田中英光三男中川民夫氏令嬢お二人が友人とともに来館

◆22日(月)
安岡章太郎名誉館長来高。橋田館長面談

◆24日(水)～12月7日(火)
「近代俳人と土佐の作家たち展」
高知県俳句連盟 共催
高知県立文学館 1階ホール 入場者472名

◆25日(木)
徳広睦子氏（上林暁実妹）来館

◆26日(金)
東京新聞文化部 大日方公男氏、難波カメラマンとともに来館

朗読コンクール会場風景

高知県立文学館ニュース　第七号　平成十二年一月五日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内二丁目一番二〇号　電話〇八八―八二二―〇二三一　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

2000年

1～3月

1月――January	2月――February	3月――March

常設展示

ミニ企画展

＜まほろばの甍＞展――1月8日(土)より

古典文学「土佐日記」コーナーに、紀貫之と同時代のものとされる瓦、土器などの資料を展示。いずれも高知県内、おもに南国市周辺で発掘されたものです。当時のおもかげをとどめる出土品で、遠い平安の昔を偲んでいただけます。（協力・埋蔵文化財センター）

当館の公式ホームページが11月からオープンしました。
随時更新していきますので、文学館の最新情報をチェックしてみてください。
常設展示のご案内もあります。
<URL>
http://www2.net-kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/

催しもの

文学カレッジ

※土佐文学への理解をさらにふかめていただけるよう開催する連続講座です。

●第3回文学カレッジ
「土佐の女性文学」
＊日時：1月15日(土)午後1時30分
＊講師：高橋正氏(徳島文理大学教授)

●第4回文学カレッジ
「大江・岡本両選集より」
＊日時：2月5日(土)午後1時30分
＊講師：片岡文雄氏（詩人）

●第5回文学カレッジ
「寺田寅彦の文学世界」
＊日時：3月18日(土)午後1時30分
＊講師：榊原忠彦
（「日本文学研究」編集責任者）

朗読の会

県内の朗読サークルが集まった「県立文学館朗読の会」によるさまざまな文学作品の朗読会を行います。入場無料。

＜朗読＞モチモチの会
15人の会
＊日時：1月29日(土)
午後2時から

＜朗読＞梨の会
＊日時：3月25日(土)
午後2時から

作家の肉声を聞く

田中貢太郎「土佐漫談」
（昭和11年1月録音）
＊日時：2月1日(火)桃葉忌
午後2時(1回目)
午後3時(2回目)
＊文学館ホールにて。当日参加。

第4回 土佐菜の花忌

生前ゆかりの窪内隆起氏の講演と伊藤周子氏による司馬作品の朗読を鑑賞します。
＊日時：2月19日(土)
午後2時～4時
※文学館ホールにて。入場無料。
往復はがきで申し込み。
（定員120名先着順）

寅彦のランチ 花物語～椿～

寅彦の好んだ食事と花をテーマに昼食会を開催します。
＊日時：2月29日(火)11時～
＊定員：30名
＊会費：3,000円程度
＊場所：牧野植物園内
レストラン
※詳細は1月中旬発表

特別企画展

〔岡本弥太生誕100年記念展 ―新世紀の詩人たちへ―〕
1999年12月18日(土)～2000年2月13日(日)

【主な展示資料】
■直筆原稿、色紙 ■宮沢賢治とのゆかり資料 ■同時代の代表詩集 ■弥太の活躍した当時の同人詩誌

関連催しもの

◆特別記念講演会
日時／1月23日(日.岡本弥太生誕記念日)13時30分～
演題／"岡本弥太と「日本詩壇」"
講師／嶋岡晨氏（詩人）
＜参加申し込み＞
往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記の上、県立文学館「岡本弥太展記念講演会受講希望」係まで。
定員（150名）になり次第締め切ります。当日余席あれば入場可。
※入場無料。文学館ホールにて

次回予告

「没後40年
追憶の吉井勇」(仮)
4月15日(土)～
5月28日(日)
文学史上に大きな業績を遺した作家であり歌人の吉井勇。没して40年、再生の地・高知との関わりを交えながら、多くの遺著や遺墨を通じ、その業績を顕彰し追慕します。

【休館日】1月――1，3，11，17，24，31日　2月――7，14，21，28日　3月――6，13，21，27日

春の行事予告

●平成12年度文学専門講座
―田岡嶺雲『数奇伝』を読む―
解説・高橋正先生
4/28(金)、5/12(金)、5/26(金)、6/16(金)、6/30(金)、7/7(金)
午後1時半～3時。定員30名。
（募集は3月1日より開始。往復ハガキに〒住所、氏名、TEL記入の上、お申込み下さい。）

●北見志保子を偲ぶ「平城山」鑑賞会
琴演奏と歌とお話と…
日時：4月2日(日)14：00～16：00
場所：文学館ホール
往復はがきで申込み。(定員120名先着順)

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

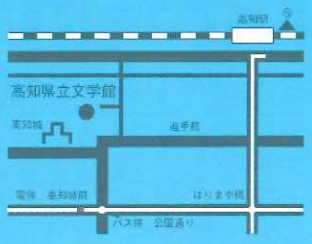
休館日　毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料　一般300円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳(1・2級)療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●JR高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩4分
●バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
〒780-0850